

信じてる

神奈川県
横浜市立永野小学校 五年

津志田 有花

学校で理科のテスト申しずまりかえった時だれかがさげんだ。「じしんだ。」いそいでつくえの下にもぐり、防災ずきんをかぶった。つくえが大きく動いたのでつくえの足をぎゅつと強くにぎりしめた。どきどきした。校庭にひなんをしてしばらくするとみんなの家族がむかえにきた。わたしは、帰る友達に手をふった。日がくれてきてまだむかえがきていない三十人ぐらいの子ども達は体育館に移動した。

友達が、「お母さんむかえにこれないかもしれない。」と不安で泣いてしまった。

でもわたしは、お母さんはぜったい来ると思っていたので、「大丈夫だよ。ぜったい来るよ。」と友達をほめました。

わたしは、お母さんと二人ぐらしなので、お母さんしかむかえにこれない。

お母さんは電車で仕事に行っている。電車はすべて止まっていて電話もつながないと先生が言った。でもわたしは、信じていた。「お母さんはきつとむかえに来る。」と……。

のこり十人。停電の中、かい中電灯の灯りで校舎の教

室に移動。わずかな灯りで紙とえんぴつを使い、先生とゲームをしてお母さんが来るのを待つ。夜になりおなかもすいてきたので、先生がおかしをくれた。それをわたしは、半分食べてのこりをそつとポケットにしまった。

一人、二人と帰りとうとう最後の一人になってしまった。しばらくすると先生が、「やつとお母さんと電話つながったよ。がんばって歩いてるつて。」と教えてくれた。歩いて？いつもは、電車で行っているからなん時間かかるんだろう。待つこと数時間。入口の方から声が聞こえる。お母さんだ。「ごめんね。おそくなつてこわくなかつた。」「ぜんぜん。」「わたしは、めいっぱい強がつて見せた。やつぱりお母さんは来てくれた。」「これあげる。」「のこしておいたポケットの中のおかしをわたすと、「ありがとう。暗いから星がたくさん見えるね。」「とお母さんは笑顔を見せた。お母さん。むかえにきてくれてありがとう。生きていてくれてありがとう。

わたしはお母さんの手をぎゅつとにぎりしめた。